

# 「あなたはひとりではないよ」 マザーズタッチ

北野小学校長 丹羽 郁人

随分と昔のことで恐縮ではあるが、ある胃腸薬のCMソングに、藤井フミヤの歌う『マザーズタッチ』という曲が頻繁に流れていた。耳に残り、心に残り、私はよく鼻歌で歌ったものである。

「♪ オー マザー オー マザーズタッチ  
愛は大きいよね 宇宙みたいに僕らを包む」

さて、「マザーズタッチ」とは、文字通り、母が子にふれる優しい手の感触のことである。母に限らず、親、保護者、大人が、子供たちにふれる優しい手の感触のことである。

長崎県にお住まいのセラピスト、光藤明美さんのエッセイがとても心に残ったので紹介したい。少し長いが、ぜひ目を通していただけると幸いです。

「今あるセラピーやヒーリングの根源は、もしかしたら「マザーズタッチ」なのかもしれない。どんなに辛くても、どんなに苦しくても、誰かが背中にそっと手をおいてくれるだけで「ああ、ひとりではないのだ」と安心できることがある。

私は子供のころ、よく病気をする子だった。少し風邪気味で頭痛い…と言いつつその日の夕方には熱が始め、夜には四〇度近い高熱を出しひどいときには嘔吐を繰り返す。あまりにも症状がひどいので、母は私の背中をさすりながら抱きかかえ、父は車を運転しよく夜間診療をしてくれる病院に担ぎ込まれていた。病院で診察を受け注射の一本でも打ってもらい薬を飲んでいると、翌朝には落ち着いてしまう。

また、あるときはお風呂上りに、背中一面に蕁麻疹がでてしまった。あまりにもかゆいので、母が市販のかゆみ止めをとりあえず塗ってくれた。すると、不思議なことに薬を塗ったその瞬間から蕁麻疹はみるみる引いてなくなってしまった。

市販の薬が、そんなに即効性もあるわけがなく。もしかしたらおわかりになられた方もいるかもしれない。わたしは、多分、母親に優しくふれて欲しくてたまらない子だったのだろう…と思う。

私が幼稚園くらいのころから母はよく体調を崩し、寝込むことが多かった。弟もまだ小さかったので、私は外に遊びに行くこともなく、家でおとなしく本を読み過ごすことが多かったような気がする。やがて小学校に上がるころ、とうとう母は長期入院することになり、退院して家に戻ってきたのは、私が小学三年になったころだったと思う。だから、母にふれたことも、ふれられた記憶もあまりない。なんだか、具合の悪い母に近づいてはいけない気もしていたから。もしかしたら、無意識に距離をおき、ガマンしていたのかもしれない。そんな私の無意識がガマンできなくなったとき、カラダがとった方法は「背中に蕁麻疹を出すこと」。そうすれば、お母さんに優しくふれてもらえる。子供の私は、いつの間にかココロの奥底で求めていることと、カラダがリンクする方法を自然と学習して覚えこんだのかもしれない。四十七歳のこの年になって、やっとあのときの自分の気持ちがあわかってきたように思う。

抱きしめて、頬ずりして、見守る。

大切なのは、ぬくもり。

それは、子供たちの生きる力の根っこになる。

「あなたはひとりではないよ。」

そのメッセージを、伝え続けたい。

